氏 名 ・ 本 籍	文　　貞　實（大韓民国）
学 位 の 種 類	博士（社会学）
報 告 番 号	乙第 46 号
学位授与の日付	平成 30 年 9 月 17 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
論 文 題 目	都市周辺層の社会空間に関する社会学的研究
審 査 委 員	（主査）　教 授　谷　富夫
	（副査）　教 授　田野　大輔
	（副査）　教 授　阿部　真大
	（副査）　教 授　岸　政彦

論文内容の要旨

1990 年代の日本はバブル経済の崩壊、グローバル化の進展、産業構造の転換、人口構造の変化などによって、経済の構造調整期に移行した。企業の年功序列・終身雇用制度が崩れはじめ、いわゆる新自由主義的政策が次々と打ち出された。その結果、失業者や非正規雇用者が増大したにもかかわらず、財政危機によって生活保障の仕組み――高度経済成長期から安定成長期にかけて成立した――がうまく機能しない。かくして生活の困窮化や格差の拡がりが社会問題として認識されるようになったのが、1990 年代の日本であった。

本論文は、こうした時代背景をもつ都市下層社会の実証的研究である。具体的には、東京山谷の寄せ場労働者、隅田川河川敷や上野公園などの女性ホームレス、神戸市長田区と東京都足立区の在日朝鮮人、および熱海温泉旅館の仲居たちである。日系ブラジル人を含む非正規雇用者のユニオン運動も、公共空間の形成可能性の観点から研究の射程に入っている。このように本論文は、現代日本の都市下層がジェンダー、エスニシティ、国籍、学歴などのコンプレックスによって特徴づけられる点に着目し、これを「都市周辺層」と呼ぶ。

都市周辺層が生活と労働をめぐって社会関係を編み出す場所を、申請者は「社会空間」と呼ぶ。この概念には彼らが、大資本が占拠する「中央ビジネス地区（CBD）」からも、中間層が住む「郊外コミュニティ」からも排除されている現実が含意されている。

調査法に関しては、さまざまな方法が自在に併用されているが、主軸はインタビュー調査である。量的調査を重視する官庁統計などは、マイノリティ集団の声を拾い集めることをあまりしない。これに対して、申請者は彼らの肉声――これを「ライフ・トーク」と呼ぶ――をたくさん、系統的に集めることによって、そのリアリティに迫ろうとする。

本論文の構成は、以上に述べた問題設定、概念整理、および方法論の他に、調査概要を加えた「序章」に続き、2 部立て 5 章と「終章」の全 7 章である。

第 1 章「寄せ場と社会空間」では、1990 年代の山谷（東京都台東区）の変容過程が、

簡易宿泊所（ドヤ）の経営者の語りなどから考察される。1960 年代の高度経済成長期、山谷は底辺労働力の一大供給基地（寄せ場）として大きな機能を果たしていた。しかし、90 年代以降の建設労働需要の減少、労働者の高齢化、および労働力供給ルートの変化などによって、そうした寄せ場は今日ほぼ壊滅状態にある。この変動期に山谷一帯の大規模再開発が重なった結果、ドヤの経営者が二極化した。資本力のある経営者はドヤをホテルに建て替えて生き残りを図り、零細経営者は廃業を余儀なくされたのである。この煽りを日雇い労働者が食らう。安宿に泊まれなくなった者は生活保護を受給して「福祉ホテル」に入るか、ホームレスとなって市中をさまようしかない。本章では、こうした山谷の空間変容と労働者の動向が、ドヤの経営者の目を通して描かれている。調査は、山谷の全宿泊所の 8 割近く、153 軒に及んだ。

第 2 章「都市空間／野宿／ジェンダー」は、21 人の女性ホームレスのインタビュー・データに基づく分析である。インタビューの場所は、上野公園のブルーテントの中、東武線浅草駅の階段、同駅周辺の路上、浅草寺の深夜の商店街のシャッター前、あるいは彼女たちを収容するシェルターの共同リビングや喫煙コーナーなどである。そこが女性ホームレスに残されたほぼ唯一の「生活（ライフ）の場」であり、申請者はその場に臨んで彼女たちの声（トーク）を聞き取っている。これが「ライフ・トーク」というタームの含意といえるが、そこで明らかになったことは、彼女たちが、野宿以前に配置されていた労働市場における自己の「商品価値」を十分知り尽くしていたということである。労働市場で「無価値」のスティグマを貼られてホームレスになっている。ゆえに、けっして元の場所――住み込みの食堂、水商売の寮、町工場、夫や子供のいる家庭――に帰りたいとは考えていない。本章は、社会的包摂論が前提とする「ホームレスはみな、とにかく仕事を探して、早くここから抜け出したいと思っている」という通念を無効化する調査結果を提示した。

第 3 章「エスニシティの社会空間」のテーマは、民族集団による地場産業の確立過程である。今日、神戸市長田区のケミカルシューズ製造業と、東京都足立区のサンダル製造業を主として担っているのは在日朝鮮人である。この業種がエスニック産業に収斂する長い過程が、地元の人びと 50 人（長田 30 人、足立 20 人）によって語られる。たとえば、これらの製造が始まる以前の明治時代から、長田にはゴム工業が、足立の周囲には皮革産業が、いわば培養基として集積していた。また、第二次大戦後、民族同胞が長田から足立へサンダルの製造技術を移転していた。さらには、日本社会に内在する民族障壁のために、日本人は業界から次々と撤退する一方、在日朝鮮人たちは技術を内部で継承し、蓄積するしか生きる術がなかった――その結果が、現在の町の姿である。

第 4 章「サービス労働市場の社会空間」では、「ジェンダーと周辺性」の問題が旅館の接客業を題材にして考察される。熱海の旅館経営者や仲居さんへのインタビューなどから明らかにされたのは、彼女たちの多くが学卒後、東京など大都市で働いた後、いったん結婚で労働市場から退出するも、離婚や借金問題など複雑な事情を抱えて労働市場に復帰するその先が、地方都市のサービス業集積地であったということである。旅館接客業の特徴は「差異化された労働」と「ジェンダー化された労働」の 2 点にまとめられる。前者に関しては、世間から接客業がスティグマ（「過去」のある人、よそ者、住居不安定者など）を貼られた人間特有の仕事と見られ、自らも同じ見方を内面化している

ために、労働市場の周辺部から中々抜け出せないジレンマを彼女たちは抱えている。後者に関しては、接客業が家事労働の延長上にあって、低賃金・長時間労働・感情労働を強いられる重労働であるにもかかわらず、勤務形態が個別化、細分化されているために、労働条件の改善に向けた運動の組織化が困難であるという問題がある。

そこで、第 5 章「労働運動と社会空間」が問うことは、不安定就労者の抵抗運動の可能性と、公共空間の形成可能性である。今日の労働市場の分断に対応して生成された社会運動に「ユニオン運動」がある。これは「地域を基盤とし、企業を超えて、労働者を組織する、個人加盟の地域合同労組」のことで、既存の企業別労働組合から疎外された、外国人労働者を含む不安定就労者の「駆込み寺」の機能を果たしている。2018 年現在、32 都道府県の 72 ユニオン（組合員数約 2 万人）が全国ネットワーク（CUNN）を結成している。申請者は、このうち 31 団体と、30 人のユニオン関係者の調査を通して、ユニオン運動が労働者の個別の問題を解決するだけでなく、多様な人びとが出会い、新たな社会関係を形成する公共空間としても機能していることを検証した。

「終章」では、本研究の意義と課題が述べられる。研究の意義としては、山谷のドヤ街、女性ホームレスが住む公園、在日朝鮮人集住地域、仲居が働く温泉旅館街、そしてユニオン運動など、複数の「都市周辺層の社会空間」を実証的に検討した点を挙げている。今後の課題としては、いまだ公共空間に到達できていない都市周辺層へのアウトリーチという実践的課題と、「生活を聞き取る方法」のいっそうの彫琢という方法論的課題を挙げて本論文を閉じている。

審査結果の要旨

本論文は、2018 年 5 月 9 日の人文科学研究科委員会において受理された。学力確認のための試験は、同日の人文科学研究科委員会において「甲南大学学位規程」第 13 条第 3 項を適用し、その全部を省略することが承認された。最終試験と公開講演会は、同年 6 月 2 日に実施された。

本論文は、都市下層研究の社会学的系譜に連なる一研究である。近年の都市下層研究では「寄せ場」や「野宿」や「飯場」などを研究者が個々に取りあげたり、あるいは階層分極化の文脈で、「ジェントリフィケーション」（都心の再開発）や「サバーバニズム」（郊外住宅地）との対比で「インナーシティ」（都心と郊外の間にあって、階層の下層性と高齢化と家屋の老朽化によって特色づけられる）を扱う傾向が強い。これに対して本論文は、多様な下層労働者と下層空間を横ならびに置くことによって「都市周辺層」の全体像に迫ろうとした。こうした研究枠組みの斬新性において、本論文を独創的な研究と評することができる。

研究対象はじつに多様である。日本三大寄せ場のひとつ東京「山谷」の現代的変容、上野公園や浅草周辺の女性ホームレス、在日朝鮮人集住地域の神戸市長田区と東京都足立区の歴史と現在、熱海の温泉旅館で働く仲居たち、そして外国人労働者を含む非正規労働者のユニオン運動などである。このように本論文は、都市下層の労働空間、居住空間、および運動空間を幅広くカバーすることによって、日本近現代の都市下層が学歴、職歴に加えて、ジェンダー、エスニシティ、国籍なども絡まる複雑な要因に規定されている実態を実証的かつ詳細に描き出した。研究の成就に約20年の歳月と、400字詰原稿用紙換算で約1400枚の紙量を要した所以である。

本論文の特色はリアリティの記述に徹した点にある。およそ研究一般について言えることだが、とりわけ都市周辺層に関しては、まずは存在そのものの確認から着手する必要がある――これが申請者の基本的な考え方であり、都市下層研究の現水準に照らして妥当な判断であると評しうる。

たとえば女性ホームレス。彼女たちは労働市場で「無価値」のスティグマを貼られ、家庭からも排除されて、公園や路上に身を置いている。ゆえに、けっして元の場所に戻りたいとは思っていない。このような彼女たちを目の当たりにした申請者が採用した研究上の戦略は、いわゆる社会包摂論――ホームレスはみな、とにかく仕事を探して、早くここから抜け出したいと思っている、との背後仮説を持つ――の安易な適用ではなく、彼女たちが排除（exclusion）の生活史を語る声にひたすら耳を傾けることであった。そこで明らかになったことは、彼女たちが社会福祉の受け手たることを峻拒したり、逆に福祉の担い手に転じていたり、さらには野宿にとどまっていたりと、じつに多彩な生活実践を一人一人が繰り広げている現実であった。

本論文にはフィールドワーク以外の方法ではけっしてわれわれの耳に届かない都市周辺層の「小さな声」が、おびただしい数収集されている。その意味で本論文は、社会学的フィールドワークの貴重な成果と言うことができる。本研究を基礎として、分析的および実践的研究に進むことが次の課題となるだろう。

今後の課題に関してあえて一点つけ加えるとすれば、方法論のいっそうの彫琢が望まれる。申請者は自らのインタビュー法を「ライフ・トーク」と呼称している。これと他の方法、たとえば「ライフヒストリー」や「ライフストーリー」との関連や異同をもっと深く考察すれば、社会調査方法論の発展にも寄与することにつながるだろう。方法論の彫琢が不十分であるために、個々の知見を総括した全体的な意義がやや理解しにくいものとなっている感は否めない。とはいえ、これらの課題が本論文を貶価するものでないことは論を俟たない。

以上、本論文は、都市周辺層の労働空間と居住空間と運動空間を幅広く渉猟するという斬新なアイディアと、長年月を費やした独自の社会調査のなかから実証的に生みだされた、きわめて独創的な研究成果ということができる。

2018 年 6 月 2 日に実施された最終試験においては、本論文の目的、方法、結果、および今後の課題について活発な質疑応答が行われた。議論は、社会調査方法論、「ライフ・トーク」の概念定義、社会学的空間理論と実証的データとの接合の問題、ユニオン運動の可能性、さらには都市下層の社会学的研究と他の社会科学との関係など多岐にわたったが、それらに対する論者の応答は的確であり、当該研究課題に関する学識を確認できた。最終試験の結果は、きわめて良好であった。

以上の結果により、審査委員は一致して、本論文が甲南大学博士（社会学）の学位にふさわしい業績であることを認めるものである。